*Tsukuba Psychological Research*
2001, **23**, 153-160



# 認知的完結欲求：情報処理量および対人関係性からの検討

筑波大学大学院(博)心理学研究科　鈴木　公基

筑波大学心理学系　桜井　茂男

The cognitive need for closure: A study in terms of information-processing quantity and social relationships

Kouki Suzuki and Shigeo Sakurai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

In this study, the relation between the cognitive need for closure and quantity of information processing is investigated. Need for cognition (Cacioppo & Petty, 1982) and functional and dysfunctional impulsivity (Dickman, 1991) were adopted as indices for the quantity of information processing. Correlation analysis showed that cognitive need for closure and need for cognition are positively related. However, while functional impulsivity is positively associated with decisiveness, dysfunctional impulsivity is negatively associated with a preference for structure and closed mindedness toward unpredictability. Further analysis revealed that the relation between cognitive need for closure and need for cognition is moderated by collectivism and by independent-dependent self-construal. Conceptual issues relating to the cognitive need for closure are discussed.
**Key words:** cognitive need for closure, need for cognition, impulsivity, moderate effect

近年の社会的認知研究においては，人を動機づけられた策略家(motivated tactician；Fiske & Taylor, 1991)として捉えた研究が盛んである．例えば，他者についての印象を形成しようとする場合，その人のできるだけ正確な印象を形成しようとするときは，様々な情報を精緻に検討するように動機づけられるが，その人がだいたいどのような人かということをすぐに第3者に伝えなければならないようなときには，あまり詳細な情報処理は行わず大まかな情報から素早く印象を形成するように動機づけられる(Brewer, 1988)．これらは“情報処理動機”と呼ばれ，それが情報処理の仕方ばかりでなく，判断の内容やそれに対する自信，さらには態度変容にまで影響を与えることが明らかになっている(例えば，Cacioppo & Petty, 1981；Sorrentino, Holmes, Hanna & Sharp, 1995)．そのようなことからも社会的情報処理動機に大きな注目が向けられるようになってきている．当初は，状況的要因によって特定の情報処理動機が引き起こされるという考えに基づいた研究が多かったものの，その後，情報処理動機には安定した個人差が存在するという考えが多く出されるようになり，それらを測定する様々な尺度が開発されている(Fletcher, Danilovics, Fernandez, Peterson & Reeder, 1986；Jarvis & Petty, 1996；Neuberg & Newsom, 1993など)．本研究ではこれらの社会的情報処理動機の中からKruglanski(1990；Kruglanski & Webster, 1996)によって提唱された“認知的完結欲求(cognitive need for closure)”をとりあげる．

認知的完結欲求は“問題に対して確固たる答えを求め，曖昧さを嫌う欲求”(Kruglanski & Webster, 1996)と定義される．認知的完結欲求は認知プロセスをより広範に捉えている点に特徴がある．すなわち，情報処理の過程を知識形成前の段階と知識形成後の段階に区別しており，認知的完結欲求はその両方の過程に影響するとしているのである．このよう

な考えは以前には見られなかったものである．知識形成前の段階(探索段階；seizing phase)では，認知的完結欲求の高い人は情報を素早く処理し，できるだけ早い時期に答えに到達するように動機づけられるが，知識形成後の段階(凝結段階；freezing phase)においては，すでに獲得されている答えを維持・持続しようと動機づけられ，さらなる情報処理活動はなされなくなると考えられている．このような，確固たる答えを素早く獲得しようとする欲求(緊急性傾向　urgent tendency)と，一度確固たる答えが獲得されるとそれを維持・持続しようとする欲求(持続性傾向　permanence tendency)の両方を包括した概念が認知的完結欲求と言うことができる．

この認知的完結欲求の個人差を測定する尺度としてはWebster & Kruglanski(1994)が42項目からなる認知的完結欲求尺度(cognitive need for closure scale)を開発している．そこでは認知的完結欲求を構成する下位因子として“秩序に対する選好(preference for order)”，“予測可能性に対する選好(preference for predictability)”，“決断性(decisiveness)”，“曖昧さに対する不快(discomfort with ambiguity)”，“閉鎖的心性(closed-mindedness)”が想定され，それが因子分析によって確認されている．さらに，尺度には信頼性と構成概念妥当性ならびに予測妥当性のあることも確認されている．

我が国においては鈴木・桜井(1999)がこの認知的完結欲求尺度の日本語版を作成している．鈴木・桜井(1999)はWebster & Kruglanski(1994)の尺度に冗長性や因子構造の問題があるとの批判(Neuberg, Judice & West, 1997；Neuberg, West, Judice & Thompson, 1997)を考慮し，3因子20項目からなる尺度を構成した．そこで見られた因子は決断性，構造に対する選好(preference for structure)，予測不可能性への閉鎖的心性(closed-mindedness toward unpredictability)であり，少なくとも我が国にける認知的完結欲求は上記の3因子に収束可能であることが明らかにされた．さらに，因子構造について検討するために確認的因子分析を行ったところ，それらの3因子は比較的独立しているものの，互いに関連しあっていることが検証され，認知的完結欲求尺度を使用する際には，従来Kruglanskiらが行っていたように尺度全体の得点のみを用いるのではなく，それぞれの下位尺度の得点も併せて検討する必要があることが示唆された．また，この日本語版の認知的完結欲求尺度についても，その信頼性および構成概念妥当性が確認されている．

本研究では認知的完結欲求についてさらなる概念の整理を行うために，情報処理量との関連について明らかにすることを大きな目的としている．従来の認知的完結欲求の理論では，認知的完結欲求の高い人の情報処理量は認知的完結欲求の低い人に比べて少ないということが想定されている(Kruglanski & Webster, 1996)．すなわち，認知的完結欲求の高い人は判断に至るまでに様々な情報を丹念に調べるようなことはなく，むしろ数少ない情報から最終的な判断をくだすということである．しかしながら，先行研究の結果はこれと必ずしも一致していない．Webster & Kruglanski(1994)は情報処理量のひとつの指標である認知欲求と認知的完結欲求との関連について検討し，両者の間には中程度の負の相関があることを見出している．しかし，後のJarvis & Petty(1996)の研究においては両者の間にはほとんど相関がないことが報告されている．

また，判断に至るまでの情報処理量について衝動性の観点から考えてみると，認知的完結欲求の高い人は衝動性が高くなると予測することができる．この点について，Webster & Kruglanski(1994)は認知的完結欲求尺度と衝動性との関連について検討し，両者の間に弱い正の相関があることを明らかにしている．しかしながら，これらの関係は統計的有意までには至っていなく，あくまでも暫定的なものとして捉えておく方がよいと思われる．以上のことから，認知的完結欲求が高いと情報処理量が低まるという単純な直線的関係が存在するとは言い切れないと言えるだろう．

これらの情報処理量の指標となる概念と認知的完結欲求との間に明確な関連を見出すことができない理由としては次の2つが考えられる．第1に，認知的完結欲求およびその下位因子が情報処理のどのような側面を重視しているのかということについて整理されていないということがあげられる．すなわち，判断を必要とされる場面での情報処理なのか，それとも判断を必要としない日常場面での一般的思考活動であるのかということである．このような観点から見ると認知欲求で取り上げているのは，日頃どの程度考える活動に従事しているかということや考えることが好きかということであり，それは明確な判断を必要としない日常的な生活場面における情報処理活動を想定していると言える．一方，認知的完結欲求においては日常場面における情報処理活動と判断場面における情報処理活動の両方を取り上げていると考えられる．例えば，認知的完結欲求尺度の決断性下位尺度は，素早く自信を持って決断することができるかということを測定しており，これは判断場面における情報処理活動に対応していると考えられる．また，構造に対する選好(Webster & Kruglan-

ski(1994)の秩序に対する選好と対応する)下位尺度では生活において環境をどの程度構造化しているかということを測定しており，これは日常場面の情報処理活動に対応していると考えることができる．

第2には，認知的完結欲求では情報処理量の少なさを不適切な衝動性として強調していたことがあげられる．言い換えれば，少ない情報処理で即断的な判断をする場合でもそれが適切に機能する場合については考慮されてこなかったのである．Dickman (1990)は衝動性を機能的衝動性(functional impulsivity)と非機能的衝動性(dysfunctional impulsivity)の2つに区別しており，衝動性には不適応的な側面ばかりでなく適応的な側面もあることを示している．したがって，衝動性という観点から認知的完結欲求と情報処理との関連について考えた場合，非機能的な(不適切な)衝動性と機能的な(適切な)衝動性の両方の側面から検討していく必要があるだろう．

これらのことから本研究の第1の目的として，認知的完結欲求と情報処理量の指標となる概念との関連を検討する．具体的には，認知欲求が示すものを日常場面における情報処理量と捉え，それぞれの下位尺度とどのような関連があるのかについて検討する．衝動性に関しては機能的衝動性に関連する下位尺度と非機能的衝動性に関連する下位尺度を明らかにする．

認知的完結欲求と情報処理量との関係を見ていく上で，さらに考慮しなければならない第3の変数の存在がある．それは認知的完結欲求に間接的に影響する要因といってもよい．例えば，その人の社会的な目標であったり文化的な規範などが考えられるだろう．そもそも認知的完結欲求の高い人はできるだけ情報処理活動を少なくしようとすると考えられるため，獲得される答えには十分な妥当性が備わっていなければならない．仮に，妥当性の低い答えを獲得した場合，周囲からの批判を受けるなどして，獲得された答えを維持することが困難になる．結局はさらに情報処理活動をし，改めて新しい答えを獲得することが必要となる．したがって認知的完結欲求の高い人は文化的価値観や社会的目標などと一致するやり方で認知的完結を達成しなければならないだろう．このような観点を考慮して，本研究では個人主義－集団主義，ならびに独立－相互依存的自己理解の2つの対人関係性についての変数を取り上げ，それらと認知的完結欲求がどのように関連しており，さらにそれらが認知的完結欲求と情報処理量との関連にどのような影響を与えているかについて明らかにすることを第2の目的とする．

具体的には，以下のような予測をたてた．

**認知欲求との関連**　認知欲求は，人が努力を要する認知的活動に従事しそれを楽しむ程度についての安定した個人差である(Cacioppo & Petty, 1982; Cacioppo, Petty, Kao & Rodriguez, 1986)．認知的完結欲求の高い人は多くの情報処理活動を望まないと考えられるため，全体的には認知欲求と負の関連があると予想される．しかし構造に対する選好についてみると，それが高い人の場合，きちんと構造化された知識や環境を構成しようと動機づけられていると考えられる．このようなことから，構造に対する選好と認知欲求との間には弱い正の関連があると予想される．

**機能的－非機能的衝動性尺度との関連**　非機能的衝動性は，速く反応することが不適切な結果をもたらすような状況においても，熟慮せず速く反応する傾向であり，従来の不適応的な衝動性を表している．機能的衝動性は，速く反応しても適切な結果が得られそうな状況において速く反応する傾向である(Dickman, 1990)．認知的完結欲求の中の決断性が高い人は，素早く自信を持った決断をすると想定している．言い換えれば，素早く反応しても適切な結果が得られると感じられたときに判断をすると考えることができる．従って，認知的完結欲求と機能的衝動性の間には正の関連があると予想される．また，構造に対する選好や予測不可能性に対する閉鎖的心性が高い人は，リスクの高いことを避けようとしていると考えられる．すなわち，不適切な反応を減らす方向に動機づけられていると言うことができる．したがって，これらの下位尺度は非機能的衝動性と負の関連が見られると予測される．

**個人主義－集団主義との関連**　個人主義的傾向の高い人は，自分で物事を判断し実行することに価値をおいていると言われている(Davidson, Jaccard, Triandis, Morales & Diaz-Guerrero, 1976)．認知的完結欲求の観点からみるとそのような人は，素早く自信を持って判断することやそのために身の回りを適切に構造化しようとする動機づけが高いと考えることができる．したがって，個人主義と決断性および構造に対する選好とは正の関連があると予測される．一方，集団主義の高い人は他者との関係性や集団内の規範等について十分理解しておく必要がある(Kashima, Siegel, Tanaka & Kashima, 1992)．また，外集団に対する寛容度も低くなると考えられる．これらは認知的完結欲求の構造に対する選好および予測不可能性への閉鎖的心性と関連していると思われる．したがって，両者と集団主義の間には正の関連があると予測される．

**独立－相互依存的自己理解との関連**　独立的自己

理解は，自己の中の誇るべき属性を見出し，表現していく主体と見ることを意味し，一方相互依存的自己理解は自己を他の人々と根本的に結びついていると理解することであり，かつ特定の他者との協調的で持ちつ持たれつの関係を維持し実現させていく主体と見ることを意味する(木内，1995)．前者は先の個人主義に，後者は集団主義に比較的近い概念と考えることができる．したがって，独立的自己理解の優勢な人は決断性が高くなり，相互依存的自己理解の優勢な人は構造に対する選好や予測不可能なものへの閉鎖的心性が高くなるものと予測される．

**個人主義ー集団主義および独立ー相互依存的自己理解が認知的完結欲求と認知欲求ならびに衝動性との関連に与える影響について**　認知的完結欲求は信頼できる知識に対する強い願望(Kruglanski & Webster，1996)と考えることができる．したがって，社会的に認められるやり方や自分が自信を持てるやり方で答えを獲得することが，認知的完結欲求の高い人には必要である．これを，対人関係性との関連で検討してみると，個人主義や独立的自己理解の高い人では，独自の視点から素早く判断することに高い価値がおかれ，様々な情報を時間をかけて考慮することについては相対的にみて低い価値をおくだろう．一方，集団主義や相互依存的自己理解の高い人は，周囲の人との関係性や所属集団の規範を重視するため，それらを十分に考慮した上で最終的な答えまで達成することに価値をおくだろう(Trafimow & Finlay，1996；Yamaguchi，1994)．このようなことから，個人主義ないし独立的自己理解の高い人においては認知的完結欲求と認知欲求の間に負の関連があるが，集団主義ないし相互依存的自己理解の高い人においてはそれらの関係が逆転することが予測される．

## 方　法

**調査対象**　大学生196名(平均年齢19.9歳)．

**質問紙**　認知的完結欲求尺度：鈴木・桜井(1999)による認知的完結欲求尺度を使用した．決断性(8項目)，構造に対する選好(7項目)，予測不可能性に対する嫌悪(5項目)の合計20項目からなる尺度である．回答形式は“全くあてはまらない”(1点)から“非常にあてはまる”(6点)までの6段階評定であり，得点が高いほど認知的完結欲求が高いことを示す．

**認知欲求尺度：**Cacioppo & Petty(1982)をもとに神山・藤原(1991)の作成した15項目の尺度を使用した．回答形式は“全くあてはまらない”(1点)から“非常にあてはまる”(7点)までの7段階評定であり，得点が高いほど認知欲求が高いことを示す．

**機能的ー非機能的衝動性尺度：**Dickman(1990)をもとに桜井(1992)によって作成された尺度を使用した．この尺度は“非機能的衝動性”12項目および“機能的衝動性”11項目の合計23項目からなる．回答方法は“全くあてはまらない”(1点)から“非常にあてはまる”(6点)までの6段階評定であり，得点が高いほど衝動性が高いことを示す．

**個人主義ー集団主義尺度：**はじめに，Singelis，Triandis，Bhawuk & Gelfand(1995)によって作成されたHorizontal and Vertical Individualism and Collectivism尺度32項目ををできるだけ原文に忠実に日本語に訳した．それを用いて予備調査を行ったところ($n$=209)，7項目が個人主義に，8項目が集団主義に該当するものと判断された．本研究ではこの合計15項目を使用した．回答形式は“全くあてはまらない”(1点)から“非常にあてはまる”(6点)までの6段階評定である．得点が高いほど個人主義ないし集団主義が高いことを示す．

**独立ー相互依存的自己理解尺度：**木内(1995)によって作成された尺度を使用した．この尺度は，相互依存的自己理解(A)を表す記述と独立的自己理解(B)を表す記述の対からなっており，よりどちらにあてはまるのかを回答するものである．回答形式は“Aにぴったりと当てはまる”(4点)から“Bにぴったりと当てはまる”(1点)までの4件法である．得点が高いほど相対的に相互依存的自己理解が高いことを示す．

**手続き**　上記の尺度が大学の授業時間の一部を利用し，集団形式で実施された．

## 結果と考察

それぞれの尺度の平均値ならびに標準偏差をTable 1に示す．また，認知的完結欲求尺度得点とそれぞれの尺度得点との相関係数をTable 2に示す．

**認知的完結欲求と認知欲求との関連**

認知欲求尺度と認知的完結欲求尺度との間には，決断性(.182，$p$<.05)と構造に対する選好(.193，$p$<.01)下位尺度で有意な正の相関が見られた．すなわち，決断性が高い人ほど，また生活において環境を構造化しようとする人ほど，努力を要する認知活動に従事する傾向があることを示している．構造に対する選好については予測と一致する結果がみられたものの，決断性については予測と反する結果であった．この原因としては，先に述べたように認知的完結欲求と認知欲求とでは取り上げている情報処理活動の側面に違いがあることが考えられる．すな

わち，判断場面における情報処理と判断を要しない日常場面の情報処理という側面である．認知的完結欲求の高い人は判断場面においては素早く決断し，情報処理量は少ないと考えられるが，それ以外の日常場面ではむしろ多くのことをよく考えているということである．また，決断性と構造に対する選好との間に.290($p$<.001)の相関があることを考慮すると，決断性の高い人は日常いろいろなことを考え，自分の知識や態度を明確に構造化しておくことによって，判断が必要とされる場面では適切に素早く判断できるということが考えられる．このことから，認知的完結欲求の高い人の知識構造について明らかにしていく研究が今後必要である．

**認知的完結欲求と機能的ー非機能的衝動性との関連**

機能的衝動性との間には決断性で有意な正の相関(.728, $p$<.001)が見られた．これは予測を支持するものであり，決断性が高い人ほど，速く反応しても適切な結果が得られそうな場面では素速く反応する傾向の高いことが明らかになった．非機能的衝動性との間には，構造に対する選好(−.425, $p$<.001)および予測不可能なものへの閉鎖的心性(−.537, $p$<.001)で有意な負の相関が見られた．これらの結果は予測を支持するものであり，生活を構造化しようとする傾向や，不確かなものを避ける傾向が高い人ほど，速く反応することが不適切な場面では熟慮せずに速く反応する傾向の低いことが明らかになった．これらの結果から，認知的完結欲求尺度の下位尺度で反応の素早さと関連するのは決断性のみであることが明らかになった．その他の下位尺度に関しては非機能的衝動性と負の関連がみられたことからむしろ素早い反応を抑制していることがわかる．このことは，構造に対する選好および予測不可能性が高い人は，無駄に行動を起こして自身の認知的完結を崩壊させてしまうよりは，行動を起こさないことによってすでに獲得されている認知的完結を維持しようとする傾向があることを示唆するものである．これはKruglanski & Webster(1996)が述べている認知的完結欲求の持続性傾向や自分の行動を正当化するために特定の情報だけを探そうとする特殊認知的完結欲求(specific cognitive need for closure)の考えとも一致している．

Table 1　各尺度の平均($M$)，標準偏差($SD$)と調査対象者数($n$)

| | $M$ | $SD$ | $n$ |
|---|---|---|---|
| 認知的完結欲求尺度(全体) | 3.101 | .532 | 196 |
| 決断性 | 2.946 | .880 | 196 |
| 構造に対する選好 | 3.316 | .779 | 196 |
| 予測不可能性への閉鎖的心性 | 3.034 | .939 | 196 |
| 認知欲求 | 4.070 | .805 | 196 |
| 個人主義 | 3.554 | .666 | 196 |
| 集団主義 | 3.604 | .656 | 196 |
| 相互依存的自己理解 | 2.629 | .338 | 194 |
| 非機能的衝動性 | 3.311 | .726 | 76 |
| 機能的衝動性 | 3.220 | .731 | 76 |

注）認知欲求(1～7点)，相互依存的自己理解(1～4点)以外はレンジは1～6点である．

**認知的完結欲求と個人主義ー集団主義との関連**

個人主義とは決断性(.362, $p$<.001)と構造に対する選好(.160, $p$<.05)で有意な正の相関が見られた．これは予測を支持するものであり，個人主義傾向が高い人ほど自信を持って決断をしたり，様々なものを構造化しようとするようになることを示している．集団主義においては構造に対する選好(.261, $p$<.001)と予測不可能なものへの閉鎖的心性(.192, $p$<.01)との間に有意な正の相関が見られた．予測通り，集団主義の高い人ほど，生活を構造化したり，不確かなものを避けようとする傾向のあることが示された．このように個人主義傾向や集団主義傾向にしたがって，個人の情報処理に対する動機づけが変化するというのは興味深い知見である．言い換えれば，対人関係性の違いによって判断に至るまでの認知的方略が異なる可能性を示唆するものと考えることができるだろう．

**認知的完結欲求と独立ー相互依存的自己理解との関連**

独立ー相互依存的自己理解尺度との相関係数は，決断性とは負の有意な相関(.422, $p$<.001)が，また予測不可能なものへの閉鎖的心性とは正の有意な

Table 2　認知的完結欲求とそれぞれの尺度との相関係数

| | 認知欲求 | 非機能的衝動性 | 機能的衝動性 | 個人主義 | 集団主義 | 相互依存的自己理解 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 認知的完結欲求尺度全体 | .179* | −.414*** | .353** | .328*** | .247*** | −.114 |
| 決断性 | .182* | .037 | .728*** | .362*** | .038 | −.422*** |
| 構造に対する選好 | .193** | −.425*** | −.139 | .160* | .261*** | .089 |
| 予測不可能性への閉鎖的心性 | −.095 | −.537*** | −.080 | .017 | .192** | .267*** |

注）*$p$<.05, **$p$<.01, ***$p$<.001.

相関(.267, $p<.001$)のあることが明らかになった．独立的自己理解が優勢な人は決断性が高く，相互依存的自己理解が優勢な人は不確かなものを嫌う傾向のあることが示されている．これらの結果は先の個人主義－集団主義と認知的完結欲求との関連とも一貫していると言えるだろう．構造に対する選好では有意な相関が見られなかったが，これは先の個人主義－集団主義の結果から分かるように，構造に対する選好は独立的自己理解の高い者と相互依存的自己理解の高い人どちらにおいても高くなる傾向があるので，それらが相殺した結果であると考えられる．

**個人主義－集団主義ならびに独立－相互依存的自己理解の調整効果の検討**

認知的完結欲求と認知欲求および機能的－非機能的衝動性との関連が個人主義－集団主義の違いや独立的自己理解－相互依存的自己理解の違いによって異なるという可能性について検討するために，Baron & Kenny(1986)に従い調整効果の検証を行った．個人主義，集団主義，独立－相互依存的自己理解のそれぞれの尺度得点の中央値によって，上位群・下位群に分け，群ごとに認知的完結欲求と認知欲求ならびに機能的－非機能的衝動性との相関係数を算出した．その結果，認知的完結欲求と認知欲求の関連について集団主義および独立－相互依存的自己理解の上位群・下位群の間に明らかな相関パターンの違いがみられた(Table 3)．

集団主義傾向の程度によって分割した結果では，上位群において認知欲求と決断性(.278, $p<.01$)及び構造に対する選好(.257, $p<.05$)との間に有意な正の相関がみられた．一方，集団主義下位群では有意な相関はみられなかった．独立－相互依存的自己理解では，相互依存的自己理解上位群において認知欲求と構造に対する選好と有意な正の相関関係がみられた(.361, $p<.001$)が，下位群では有意な相関はみられていない．これらの結果は，認知欲求と認知的完結欲求との関連で正の相関関係が見られていることを考慮すると，概ね予測を支持するものと考えることができるだろう．すなわち，集団主義傾向や相互依存的傾向の高い人において，認知的完結欲求の高い人ほど多くの思考活動に従事することを示している．また，個人主義の程度で分割した場合にも，個人主義傾向の上位群では構造に対する選好と認知欲求との間に有意な相関が見られていない(.114, *n.s.*)ものの，下位群では有意な相関が見られている(.261, $p<.05$)．この結果，集団主義や相互依存的自己理解の結果と一貫するものであると言える．

さらに，我が国がどちらかというと集団主義や相互依存的な対人関係性であるといわれていることを考慮すると，先に見られた認知的完結欲求と認知欲求との正の関連は，我が国の文化的背景を反映した特徴的な結果であると考えることもできるだろう．

認知的完結欲求と衝動性の関連については，個人主義－集団主義や独立－相互依存的自己理解の高低による違いがほとんどみられなかった(Table 4, 5)．認知的完結欲求と衝動性との関連は対人関係性に影響を受けないものであることが示された．言い換えれば，先に見られた両者の関係(すなわち，決断性と機能的衝動性の正の関連，および構造に対する選好，予測不可能性への閉鎖的心性と非機能的衝動性の間の負の関連)は認知的完結欲求と大きく関係する根本的な概念であることを示唆するものであろう．

## まとめと今後の課題

本研究では，認知的完結欲求と情報処理量との関連について，認知欲求と機能的－非機能的衝動性の2つの情報処理量に関する指標を用いて検討した．その結果，認知欲求との関連についてはこれまでみられた結果とは異なり，認知的完結欲求との間に正の関連がみられた．衝動性との関連については，下位尺度ごとに関連が異なることが明らかにされた．さらに，対人関係性に関する要因と併せて検討を行ったところ，認知的完結欲求と認知欲求の関連は集団主義および独立－相互依存的自己理解の違いによって異なっていることが明らかにされた．

本研究の結果から，認知的完結欲求の概念を整理していく上で重要と思われる点を2つあげてみる．ひとつ目は文化的要因の影響を考慮していく必要性である．認知的完結欲求と認知欲求の関連が対人的要因によって調整されているという結果は，我が国特有の文化的要因が影響して両者の関係を変化させたと解釈することも可能である．社会的認知に文化差があるという知見も最近では多くみられるようになり(例えば，北山・増田，1997)，認知的完結欲求においてもこの点を考慮した文化心理学的な研究が必要とされるだろう．

このことと関連して，認知的完結欲求と現象との関連を検討していく上では，表面的現象と根本的現象を区別していく必要性があるだろう．本研究では認知的完結欲求と認知欲求は対人関係性によって関連が変化したが，衝動性については変化しなかった．これは認知的完結欲求に直接関連し他の要因の影響を受けにくいものと，認知的完結欲求との関連が第3の要因によって変化させられるものの，2種類の変数の存在を仮定しなければならないことを示唆している．認知的完結欲求の概念を整理していく

Table 3　認知的完結欲求と認知欲求の相関係数

| | 認知的完結欲求尺度全体 | 決断性 | 構造に対する選好 | 予測不可能性への閉鎖的心性 |
|---|---|---|---|---|
| 個人主義 | | | | |
| 上位群($n$=84) | .240* | .258* | .185+ | −.064 |
| 下位群($n$=112) | .115 | .078 | .208* | −.107 |
| 集団主義 | | | | |
| 上位群($n$=97) | .274** | .278** | .257* | −.090 |
| 下位群($n$=99) | .101 | .058 | .167 | −.071 |
| 独立－相互依存的自己理解 | | | | |
| 上位群($n$=95) | .278** | .138 | .361*** | .044 |
| 下位群($n$=101) | .025 | .046 | .043 | −.067 |

注）*$p$<.05, **$p$<.01, ***$p$<.001.

Table 4　認知的完結欲求と非機能的衝動性の相関係数

| | 認知的完結欲求尺度全体 | 決断性 | 構造に対する選好 | 予測不可能性への閉鎖的心性 |
|---|---|---|---|---|
| 個人主義 | | | | |
| 上位群($n$=44) | −.233 | .201 | −.475** | −.316* |
| 下位群($n$=32) | −.553*** | −.071 | −.330+ | −.716*** |
| 集団主義 | | | | |
| 上位群($n$=44) | −.328* | .107 | −.457** | −.515*** |
| 下位群($n$=32) | −.544** | −.051 | −.394* | −.57*** |
| 独立－相互依存的自己理解 | | | | |
| 上位群($n$=36) | −.437** | −.242 | −.199 | −.580*** |
| 下位群($n$=40) | −.412** | .255 | −.693*** | −.491** |

注）*$p$<.05, **$p$<.01, ***$p$<.001.

Table 5　認知的完結欲求と機能的衝動性の相関係数

| | 認知的完結欲求尺度全体 | 決断性 | 構造に対する選好 | 予測不可能性への閉鎖的心性 |
|---|---|---|---|---|
| 個人主義 | | | | |
| 上位群($n$=44) | .402** | .809*** | −.162 | −.132 |
| 下位群($n$=32) | .403* | .695*** | −.013 | −.006 |
| 集団主義 | | | | |
| 上位群($n$=44) | .415** | .738*** | −.161 | .015 |
| 下位群($n$=32) | .421* | .789*** | −.018 | −.099 |
| 独立－相互依存的自己理解 | | | | |
| 上位群($n$=36) | .209 | .581*** | −.119 | −.018 |
| 下位群($n$=40) | .500*** | .794*** | −.154 | .054 |

注）*$p$<.05, **$p$<.01, ***$p$<.001.

上では，表面的要因にとらわれることなく根本的要因に重点をおいて構造化していく必要があるだろう．

## 引用文献

Baron, R.M. & Kenny, D.A. 1986 The moderator-mediator distinction in social psychological research: Conceptual, strategic, and statistical considerations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 1173-1182.

Brewer, M.B. 1988 A dual process model of impression formation. *Advances in Social Cognition*,

**1**, 1-36.

Cacioppo, J.T. & Petty, R.E. 1981 The need for cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 116-131.

Cacioppo, J.T., Petty, R.E., Kao, C.F. & Rodriguez, R. 1986 Central and peripheral routes to persuasion: An individual difference perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 1032-1043.

Davidson, A.R., Jaccard, J.J., Triandis, H.C., Morales, M.L. & Diaz-Guerrero, R. 1976 Cross-cultural model testing: Toward a solution of the etic-emic dilemma. *International Journal of Psychology*, **11**, 1-13.

Dickman, S. 1990 Functional and dysfunctional impulsivity: Personality and cognitive correlates. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 95-102.

Fiske, S.T. & Taylor, S.E. 1991 *Social cognition*. New York: McGraw-Hill.

Fletcher, G.J.O., Danilovics, P., Fernandez, G., Peterson, D. & Reeder, G.D. 1986 Attributional complexity: An individual differences measure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 875-884.

Jarvis, B. & Petty, R.E. 1996 The need to evaluate. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 172-194.

Kashima, Y., Siegel, M., Tanaka, K. & Kashima, E.S. 1992 Do people believe behaviors are consistent with attitudes? Toward a cultural psychology of attribution processes. *British Journal of Social Psychology*, **331**, 111-124.

北山 忍・増田貴彦 1997 社会的認識の文化的媒介モデル：対応性バイアスの文化心理学的検討 柏木惠子・北山 忍・東 洋(編) 文化心理学：理論と実証 東京大学出版会 Pp.109-127.

木内亜紀 1995 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **66**, 100-106.

神山貴弥・藤原武弘 1991 認知欲求尺度に関する基礎的研究 社会心理学研究, **6**, 184-192.

Kruglanski, A.W. 1989 *Lay epistemics and human knowledge: Cognitive and motivational bases*. New York: Plenum.

Kruglanski, A.W. & Webster, D.M. 1996 Motivated closing of the mind: "Seizing" and "freezing." *Psychological Review*, **103**, 253-283.

Neuberg, S.L., Judice, T.N. & West, S.G. 1997 What the need for closure scale measures and what it does not: Toward differentiating among related epistemic motives. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 1396-1412.

Neuberg, S.L. & Newsom, J.T. 1993 Personal need for structure: Individual differences in the desire for simple structure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 113-131.

Neuberg, S.L., West, S.G. Judice, T.N. & Thompson, M.M. 1997 On dimensionality, discriminant validity, and the role of psychometric analyses in personality theory and measurement: Reply to Kruglanski et al.'s (1997) defense of the need for closure scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 1017-1029.

桜井茂男 1992 機能的－非機能的衝動性概念の検討 日本心理学会第56回大会発表論文集, 842.

Singelis, T.M., Triandis, H.C., Bhawuk, D. & Gelfand, M.J. 1995 Horizontal and vertical dimensions of individualism and collectivism: A theoretical and measurement refinement. *Cross-Cultural Research*, **29**, 240-275.

Sorrentino, R.M., Holmes, J.G., Hanna, S.E. & Sharp, A. 1995 Uncertainty orientation and trust in close relationships: Individual differences in cognitive styles. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 314-327.

鈴木公基・桜井茂男 1999 認知的完結欲求と権威主義・独断主義・曖昧さに対する不耐性との関連 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 161.

Trafimow, D. & Finlay, K. 1996 The importance of subjective norms for a minority of people: Between-subjects and within-subjects analyses. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **22**, 820-828.

Webster, D.M. & Kruglanski, A.W. 1994 Individual differences in need for cognitive closure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 1049-1062.

Yamaguchi, S. 1994 Collectivism among the Japanese: A perspective from the self. In U. Kim, H.C. Triandis, C. Kagitcibasi, S.-C. Choi, & G. Yoon (Eds.), *Individualism and collectivism: Theory, method, and applications*. Newbury Park, CA: Sage. Pp.175-188.

—2000. 9. 29 受稿—